

	第1章
	第2章
	第3章
	第4章
	第5章
第6章	本計画の進行管理
	資料

第6章

本計画の進行管理

本計画の進行管理では、個別の取組ごとに実施計画を作成し、計画期間の最終年度には、計画全体の見直しを行います。

個別の取組の進捗は、年度ごとに取組内容、成果、課題等を整理するとともに、数値目標の達成状況を確認し、丸亀市文化芸術推進審議会で検証します。この検証結果に基づき PDCA サイクルを適用し、計画の改善を図ります。

評価においては、計画の実効性を高めるため、多様な市民の意識や施策の進捗を測る成果指標を設定し、客観的に検証します。成果指標は評価・検証の負担を考慮し、精選したものを適切に設定します。

検証結果は、計画内容の見直しや次年度の実施事業、新規事業の検討等に活用するとともに、市民に対して文化芸術の推進の成果や効果を公表します。事業のインパクト評価を見据え、企画段階から様々な主体との丁寧な対話を重ね、事業の価値を引き出し、さらなる市民の理解や関心を広げ、深めます。

■成果指標について

本計画では、成果指標を定量的な側面だけでなく、定性的な側面についても視野に入れます(*1)。ニーズの多様化や人口減少等の社会状況により、従来の参加者数や実施回数等の数値だけでは推し量ることのできない変化を捉えることを重視し、設定した成果指標等を継続的に検証することで、目標の達成に向かって、より適切な形に近づけていくことが可能と考えます。このような定性的指標等の評価にあたっては、PDCA サイクルにロジックモデル(*2)や MSC (モスト・シグニフィカント・チェンジ) (*3)等を組み合わせる手法があります。

(*1) 定量と定性の違い

定量…数値・数量で具体的に表すことができる。
定性…数値・数量で表せない性質を捉える。

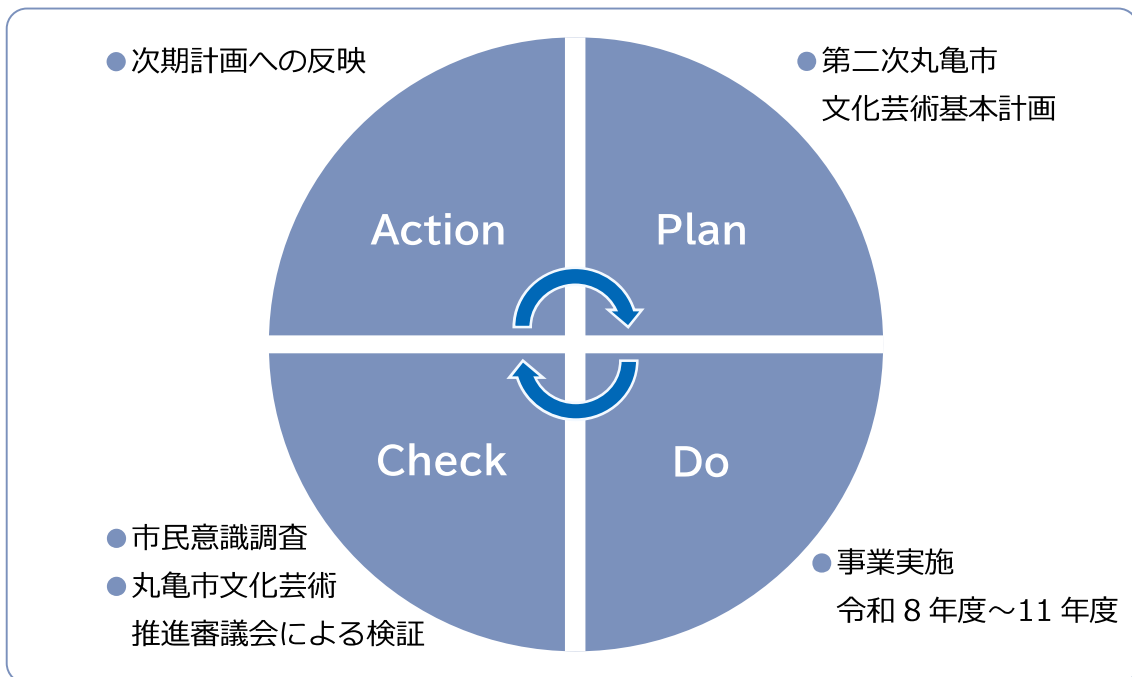
(*2) ロジックモデル

事業や活動の流れを「資源(Input)→活動(Activity)→成果(Output)→効果(Outcome)」として図式化する手法。目標達成までの因果関係を整理し、定量・定性的な成果の評価や改善に活用することができる。

(*3) MSC (モスト・シグニフィカント・チェンジ)

参加者が経験した「最も重要な変化」のストーリーを収集し、関係者がその意味や背景を話し合いながら選定・共有する評価手法。数値では捉えにくい定性的な成果を可視化し、活動の価値や改善点を深く理解することができる。

■PDCAサイクルの図



(1) PDCAサイクル

- ① Plan(計画) 施策や事業に関する目標などを定める
 - ② Do(実施) 上記①の方策などを実施する
 - ③ Check(評価) 定期的に上記①の見込みなどの進行状況について評価する
 - ④ Action(改善検討) 上記③を踏まえ、必要に応じて①の見直しを行う
- *見直した後は、再度①、②、③、④を繰り返す。

(2) 定性的な成果指標を扱う場合のPDCAサイクル

- ① Plan(計画) 施策や事業に関する定性的な目標などを定める
- ② Do(実施) 上記①の方策などを実施し、活動の記録に定性的な観察も残す
- ③ Check(評価) ロジックモデルやMSC等で成果を評価
- ④ Action(改善検討) 上記③を踏まえ、必要に応じて①の見直しを行う